JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	持続可能な観光に向けた地域外観光システムとの関係性構築とそのマネジメント
Author(s)	敷田，麻実；森重，昌之
Citation	日本観光研究学会全国大会学術論文集，22：359-360
Issue Date	2007-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16780
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2007 日本観光研究学会. 敷田麻実，森重昌之，第22回日本観光研究学会全国大会学術論文集，2007，pp.359-360.
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

日本観光研究学会第22回全国大会論文集（2007年12月）pp. 359－360
Proceedings of JITR Annual Conference, 2007. All rights reserved.
Printed in Japan. Copyright 2007 Japan Institute of Tourism.

持続可能な観光に向けた地域外観光システムとの関係性構築とそのマネジメント

Relationship Management with Extra-regional Tourism System for Tourism Destinations

敷田　麻実*　　森重　昌之**
SHIKIDA, Asami　MORISHIGE, Masayuki

キーワード：サステイナブルツーリズム、自律的な観光、観光協会、自律的な依存

1．目的

現在の観光において、持続可能性は重要なテーマである[1]。同時に、地域主体の観光が重要であると主張され、「自律的観光」の実現が観光目的地の課題となっている[2]。しかし、マスツーリズムに代表される大規模な観光システムによって地域は「他律的観光」を余儀なくされ、持続可能な観光の実現も滞りがちである。

そこで本研究では、地域の観光関係者が地域外の観光事業者や観光客を含む「地域外観光システム」との関係性を主体的に構築し、自律的にマネジメントすることで持続可能な観光の実現につなげるためのアプローチを提案する。

ここでは先行研究に倣い[3]、観光現象を１つのシステムとして捉えた。また、主に出発地の観光関係者と関連事業者、観光客を「地域外観光システム」、観光目的地の観光関係者や行政、住民などの地域関係者を「地域観光システム」として区分した。なお、本研究は国内の観光を対象として考察した。

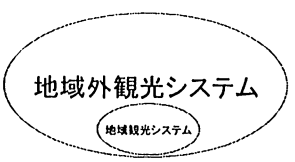
2．背景

マスツーリズムは誰でも参加でき、また大量の観光客を扱う観光として1960年代以降、観光現場を席巻してきた[4]。その結果、観光目的地では観光活動による地域への負荷が高まり、無視できなくなった。こうした事例は各地で報告され、またその緩和策が課題となってきた。

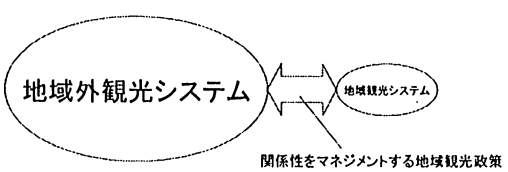
そこでマスツーリズムの持つ地域社会や経済・環境への影響を緩和しようとする「新しい観光」が模索された。その代表例はエコツーリズムである。こうした動きは1990年代以降、持続可能な発展や産業・企業のグリーン化という社会的圧力を受け、「持続可能な観光（サステイナブルツーリズム）」をめざすことに引き継がれた。しかし実際の観光地では、大規模な地域外観光システムの影響を受けているため、地域側が主体的に地域観光システムを変化させることが難しい。特に地域経済における観光収入の依存度が高い場合、観光客数の減少につながる施策は選択しにくい。

3．地域内外の観光システムの関係

前述した地域外観光システムへの依存傾向は、マーケティングや集客、さらには経営指導にまでも及んでいる。それは図-1(A)に示すように、地域外観光システムが地域観光システムを包含している状態と考えることができる。一方、自律的観光ではこの関係が図-1(B)のようになり、地域外観光システムとの関係をマネジメントできるようになる。この状態は、地域外観光システムから地域観光システムが自立(独立)しているように思われるが、本研究ではこの関係性を自律的にマネジメントする必要性を提案する。



(A) 地域外観光システムの依存状態にある地域観光システム



(B) 地域外観光システムと自律的関係にある地域観光システム

図-1　地域内外の観光システムの関係

4．自立から自律へ

地域の観光をマネジメントするという考えは、地域外の大規模な観光システムに地域が依存した(できた)マスツーリズムでは必要性が低かった。特に比較的安

*北海道大学観光学高等研究センター
**北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程

定した経済状況や経済規模の拡大期には、大きな問題にならなかった。しかし、1990年以降に起きたバブル崩壊や大規模な観光リゾート開発の失敗、地域経済の停滞による観光需要の変化などによって問題が露見し、地域外観光システムが地域に深刻な問題を起こすと、その原因は「地域外への過度の依存」だとされた。

そのため、大規模な地域外観光システムへの地域観光システムの依存が持続可能な観光の実現を阻害するとして原因として批判され、持続可能な観光の実現のために地域観光システムの「自立」が必要であるという主張が生まれた。また、「新しい観光」に代表される、エコツーリズムなどの取組みを始める地域が増えた[5]。

しかし前述したように、現実には大規模な地域外観光システムから地域観光システムが分離・独立することは難しく、地域で自己完結する「自立的な観光」の実現は難しい。その理由は、そもそも観光は予測が難しい現象であり、地域外観光システムに比べて規模の小さい地域観光システムはそのリスクを負担できない。また情報システムの発達によって地域外観光システムの新たな「コントロール」も広がっている。さらにインターネットの普及で、観光の知識や情報を豊富に備えた「新しい観光客」が生み出されているが、地域だけでは彼らに十分対応できないからである。以上のように地域外観光システムから地域が自立するという選択の実現度は低い。

そこで地域外観光システムからの自立(独立)をめざすのではなく、地域外観光システムとの関係を主体的に構築し、それを維持するマネジメントが求められる。その具体的な姿は、地域観光システムが地域外観光システムと適度な依存関係を保ちつつ、持続可能な観光の実現をめざすことであり、地域観光システムの自律的デザインであろう。

このような自立でも依存でもない、いわば「自律的な依存」戦略を地域が採用することで、地域外観光システムとの関係に配慮しながらマネジメントできるようになる。このようなアプローチは、地域外観光システムのマーケティング力やノウハウを否定せず、それを適宜取り入れながら、地域観光システムを進化させることであり、地域外観光システムとの創発的な関係維持である。その根拠は実証研究の結果を待たなければならないが、このための地域観光システムは次のようになると考えられる。

5．戦略に必要なツールとその可能性

「自律的な依存」を基本とした関係性のマネジメントを実現するには、地域観光システム側にそれを進めるための主体となる組織、それに伴う方針としくみが必要である。地域観光システムには行政、民間の観光関係者、さらに最近はまちづくりNPOなどの多様なアクターが関係するので、こうしたアクターが参加した主体が望ましい。そこで、地域観光システムと地域外観光システムの関係性をマネジメントする多様な地域関係者が参加する「プラットホーム」を観光協会と位置づけてはどうか。例えばそれは、従来からある地域の観光協会の役割を変化させることで実現できるのではないか。現状では、観光協会は広告やキャンペーンを実施する程度という場合が多いが、地域の自律的な観光のために観光協会を活用することは、新たな組織を創設する負担を選ぶよりも合理的であろう。

最近、稲取温泉(静岡県東伊豆町)、北海道羅臼町などをはじめ、事務局長を公募し、観光協会を改革して地域観光を活性化する動きがある。しかし観光協会自体の改革が目標となっており、地域観光システムの転換ではない。そこで即効的な「観光まちおこし」を観光協会改革の目標にするのではなく、地域観光システムを持続可能にする戦略(ビジョン)を作成し、それを実施することをめざしたい。そして「新たな観光」のニーズについて研究し、地域の観光関係者のネットワークを強化し、そこで持続可能な観光など観光にかかわる技術や知識の学習活動を支援することで、地域が自律的にマネジメントしていけるのではないだろうか。

以上のように、観光協会を活用し、地域外観光システムとの関係性を意識しながら、自立でも依存でもない「自律的な依存」戦略を地域観光システムが選択できれば、持続可能な観光を実現できるだろう。

【参考文献】

1) 佐藤誠(2002)：グリーンホリデーの時代, 岩波書店

2) 石森秀三(2001)：21世紀における自律的観光の可能性（石森秀三・真板昭夫編「エコツーリズムの総合的研究(国立民族学博物館調査報告23)」国立民族学博物館），pp.5-14.

3) Weaver, D. and Lawton, L (2001) ：Tourism Management, John Wiley and Sons

4) 安村克己(2003)：新しい観光再考－サステイナブルツーリズムの現在と展望（山上徹・堀野正人編「現代観光へのアプローチ」白桃書房），pp.211-224.

5) 古川彰・松田素二編(2003)：観光と環境の社会学」, 新曜社